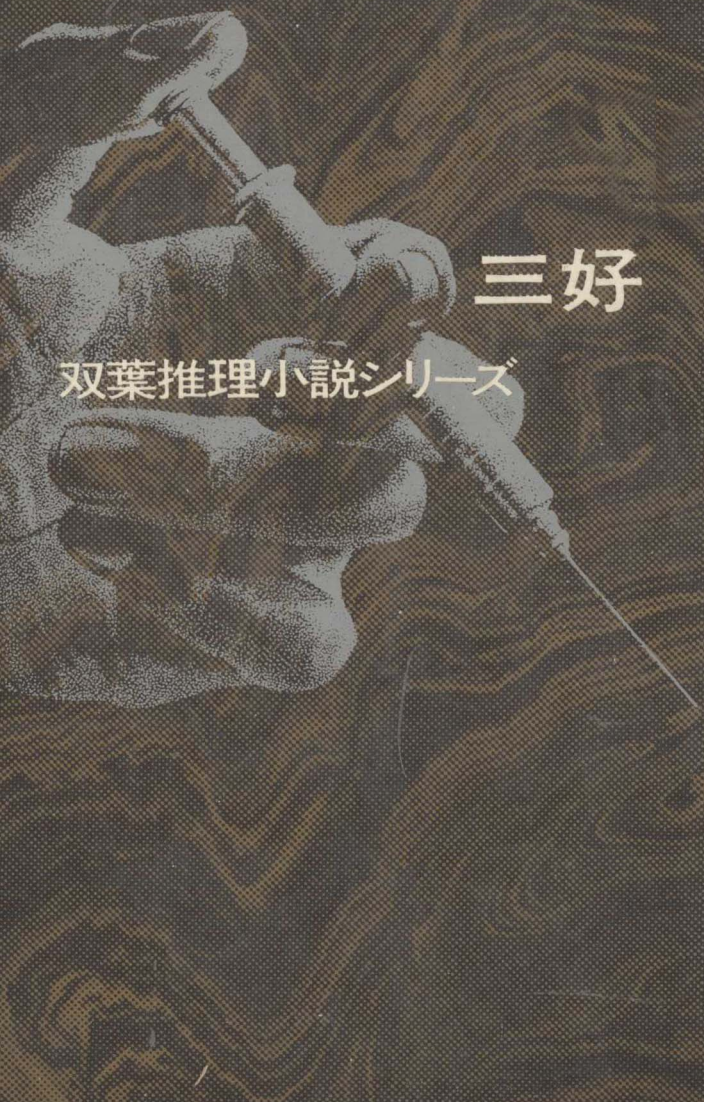


生けるものは銀

三好 徹

双葉推理小説シリーズ



双葉推理小説シリーズ⑥

生けるものは銀

480円

昭和47年 5 月15日 初版発行

昭和47年 6 月15日 5 版発行

著 者 ^み三 ^{よし}好 ^{とおる}徹

東京都世田谷区奥沢 3 の 3 の 6

発行所 瀬川雄章

発行所 ^{株式}双葉社
^{会社}

東京都新宿区神楽坂 1 の 8

郵便番号162

電話 東京(268)5111(代)

振替 東京117299

印刷 三晃印刷株式会社

製本 株式会社川島製本所

© 三好 徹1972

落丁・乱丁の場合は本社にてお取りかえいたします

0393-200006-7336

目次

前兆 5

元憲兵 21

秘密 38

消える 54

影の部分 70

ミスター・マオ 86

手がかり 101

孤独な道 117

鎖 132

黒い渦 147

没法子 163

香港 178

国境線 194

ギャンブル・シテイ 210

死線 226

銀と瓦礫 242

装
幀
重
原
保
男

前 兆

1

滝口美紀の父親に会うまで、神野保彦はかなり自信をもっていた。考えぬいた言葉を用意していたし、相手の態度がどうであろうと、臨機応変にさばけるつもりだった。といって、かれが平靜そのものだったというわけではなかった。恋びとの父親に会って結婚の許しを求めようとする男が、平靜でいられるはずもない。ただ、誠意をこめて話せば、わかってくれるだろう、という安心感のようなものはあったのだ。

美紀の父親、滝口淳平は小さな会社を経営している。小さな会社、といってもその内容はひどく良いという話

である。社員は数人しかいないのだが、ある抗生物質の販売権を一手に握っていて、それを売りさばくだけでかなりの手数料がころがりこんでくる。

田園調布の邸宅街にある滝口家は、広い庭をもった数寄屋ふうの造りで、保彦の案内された応接間だけが洋風になっていた。

時刻はすでに夜八時ごろで、あたりは静まりかえっていた。静かすぎて、保彦には落ち着けなかった。ふかぶかとしたソファに浅く腰を下ろしている保彦は、一時間前に出てきた新聞社の喧噪にみちた空気をふとなつかしいものに感じた。吸いガラが山積みになった灰皿や食べ残しのどんぶりが並んでいる、あの雑然とした場所が性に合っているように、保彦には思われた。

美紀と結婚できるようになっても、自分は決してこういふところには住まわないだろう、また安月給では住めもしないが、とかれは、壁にかかっている高名な画家の絵を眺めながら考えていた。

「お待たせした」

といつて、和服姿の淳平が入ってきた。保彦は反射的に腰をうかし、神野保彦です、と挨拶した。

「きみが神野君か」

と滝口淳平が立ったままでいった。抑揚のない口調だった。

それが喰い違いのはじまりであった。先方が立ったままであり、腰を下ろすようにすすめもしないので、保彦の方も坐るわけにはいかなかった。いきおい、棒立ちの姿勢で話すようになり、まるで対決するような雰囲気がかもし出されてしまったのだ。

保彦の口から飛び出した言葉も、あらかじめ考えたものとは別ものになってしまった。

「ぼくはお嬢さんと結婚しようと思っています」

そういつてから、保彦は、唐突すぎてまづかったな、と気づいた。しかし、かれの意思に反して、言葉の方がひとりでに淳平めがけて飛び出して行く。

「そういうわけで、今晚、お邪魔にきました」

淳平は帯に手をかけ、ほう、といったげに口もとをす

ばめた。それから、ひどくゆっくりとした動作で回りこみ、羽織のすそをさばいて腰を下ろした。

続いて保彦も坐ったが、用意しておいた名文句はとうに頭の中から失せていた。臨機応変どころか、ゆび先まで硬ばっている。気をしずめようとしてタバコを口にくわえたが、フィルターの方に火をつけかける始末だった。

淳平はにこりもしなかった。

「藪から棒、とはこのことだね」

「それでしょうか」

淳平は、あきれたというふうに眼をしばたいた。保彦はかまわずいった。

「ぼくは、お嬢さんがお話ししてくださいと思っています。いたものですから、そこで……」

「まア、待ちなさい」

保彦の意気込みをそらすように手をあげ、

「全然、聞いとらんというわけじゃない。新聞社にお勤めだということは、あれから聞いている。いや、ついさ

つき、聞いたばかりなんだが、新聞社の方は何部かな？
社会部か政治部か……」

「航空報道部です。略して、航報部といっていますが」

「航空報道部というのと、飛行機の？」

「そうです。ぼくは航空大学の卒業で、社ではセスナの方をやっています」

「そうすると、パイロット？」

「はあ」

淳平の顔がわずかに動いた。

保彦はもどかしかった。美紀は、うちのパパは気難し屋だから、話す時機がむずかしいとはいっていた。だが、これでは、なにも話してこないにひとしい。それとも、淳平が、聞いていながら知らないふりをしているのだろうか。

「それで、パイロットになったのは、だれかにすすめられてかな？」

「すすめられたわけじゃありません。おふくろは反対していました。おやじがやはり飛行機のりだったものです

から」

「なるほど。で、お父上は……」

「なくなりました。戦争中ですけれど」

「陸軍？ 海軍？」

「いいえ、軍人じゃなかったんです。中華航空という会社のパイロットでした」

「中華航空の！」

「ご存知ですか」

淳平は、いったんつばを飲みこむようにのど仏を動かしてから、かすかにうなずいてみせた。

「そういう会社のあったことは、知っている。あのころは、内地を大日本航空が受けもち、中国大陸を中華航空がカバーしていた。たしか、そうだったと思うが……」

「ぼくは子供だったんで、くわしい話は知りませんが、おっしゃるとおりだったと聞いています」

身許調べをされているらしい、と保彦は感じた。ということは、最初の印象と違い、事態は好転しつつあるといえるのではあるまいか。とつつきにくい感じをあたえ

られたが、なかみは外見ほどではないのかもしれない
……。

2

滝口淳平は、天井の片隅をじっと見据えるようにしていた。時間にすれば、ほんの一分足らずの間であったが、保彦には十分以上にも感じられた。それから淳平は口のなかでなにか呟いた。だが、保彦には聞きとれなかった。

淳平が口もとを引きしめた。保彦は背筋を硬こもばらせて、相手の言葉を待った。

「それで、美紀といっしょになりたいそうだが、かりに結婚した場合、いまの勤めをどうするおつもりかな？」

「どうするつもりか、といえますと？」

「辞めて、わたしの会社に入ってくれるかどうか……」

「ぼくは新聞社を辞める気はありません。好きで選んだ道ですから」

「失礼だが、新聞社の月給は？」

「本俸はとても安いんです。でも、飛ぶと航空手当がもらえますから、ふたりで食べて行くのはじゅうぶんだと思います。もっとも、贅沢はできませんが……」

「美紀はわたしの一人娘だ。だから、あれと結婚する人に、わたしの仕事を引き継いでもらわねばならない」

「しかし……」

いいかける保彦の鼻先をびしゃりと抑えるように、淳平がきつぱりした口調でいった。

「そればかりじゃない。パイロットは危険な職業だ。現に、お父上も亡くなられたそうではないか。そういう仕事に、わたしは、婿となる人を従事させておくわけにはいかない」

「飛行機が危険だというのは、現代では通用しない迷信みたいなものです。航空機の事故率は、鉄道なんかよりも低いんですよ」

「そうだろうか。新聞社の飛行機が取材中に事故を起こしたという記事を、わたしは何度か読んだ記憶がある。いずれにしても、パイロットを辞めてもらわねば、安心

できない」

「そうすると、辞めなにかぎり、ぼくらの結婚は認めていただけないということでしょうか」

そうだとするうちに、淳平はうなずいた。

保彦はなおもいった。

「理由は本当にそれだけですか」

「どういう意味かな？」

「かりに、新聞社を辞めるにしても、ぼくはおたくの会社には入りませんよ」

「なぜ？」

「ぼくがそうすれば、財産が目当てかと思われるのがいやなんです」

淳平の口もとがよじれた。それが笑いの表現なのか怒りのあらわれなのか、保彦には判断できなかった。淳平はいささか驚いていった。

「よほどパイロットが好きらしいね」

「好きです」

「危険な仕事だからかね」

「ぼくは少しも危険だとは思っていません」

「しかし、危険であることには変わりはない。若いから、死というものを軽く考えすぎているように、わたしには思えてならない」

「でも、道を歩いていても、空からなにか降ってきて死ぬことだってあります。かなり前のことですが、自殺を決意した人がビルの屋上から飛びおりました。すると、その下を歩いていた人の上に落ち、自殺しようとした人は助かって、歩行者が死んだという事件があります」

「じつに教訓的な話だね」

「おっしゃるとおり、ぼくは若いけれど、死というものを考えないわけではないんです」

「しかし、きみは死を少しも怖がっていないね」

「あるいは、そうかもしれせん」

そう答えながら、保彦は、なにを話しにここへきたのだろう、と思わずにはいらなかった。これでは、まるで死についての人生論をかわしたようではないか。

本当は、死という忌むべきものではなく、結婚という至上の喜びを得るためにきたはずなのに……。

保彦は少し興奮していった。

「ぼくはお嬢さんと結婚したいのです。いや、結婚するつもりです」

「きみは、一本気ないい青年だ」

淳平が軽くなすようにいった。答えようがなくて、保彦は沈黙を守った。淳平はなおもいった。

「わたしはきみが好きになったよ。どうだろう？ 考えなおして、わたしの会社に入ってくれないかね」

「いまのぼくには、その気持はありません。それに、理屈をこねるようですが、結婚は両性の合意があればそれでいい、と憲法でも認められています」

「そのようだね」

「ぼくが今夜お邪魔したのは、できることならご家族の方にも祝福された結婚をしたかったからなんです」

「そうすると、きみは美紀をわたしの手からさらって行くというわけだね」

どう返事したらよいのかわからなかったが、淳平があくまでも反対するならば、結果として、そういうことになるだろう。保彦は唇をぎゅっと結んでうなずいた。

淳平は手を鳴らして、家政婦を呼んだ。

「お客さまがお帰りだ」

お嬢さんに会わしてください、といったかったが、その言葉をのみこんで、保彦は外へ出た。

門を離れてから、かれは振り向いた。美紀がいるはずの、灯のともった二階の部屋の窓を、祈るような気持で見上げたが、窓はついに開かれなかった。

3

東洋新聞航空報道部の本拠は、銀座の社屋におかれているが、保彦たちパイロットは、専用飛行場のある多摩川分室で待機している。なにか事件があれば、いつでも飛び立てる仕組みなのだ。そのかわり、事件のないときは、分室のなかで、部員たちは将棋をさしたり、カードをしたりしている。

この分室の主といわれているのが、ヘリコプター・パイロットの大場だった。戦前からのベテランで、八千時間以上の記録をもっている。

保彦は、大場と将棋をさして、三番棒に負けた。一局百円の約束である。日ごろは、たいいてい大場から頂くのだが、この日の保彦はひどく調子が悪かった。

大場はにこにこしていった。

「もう一番くるか」

「いや、きょうはやめておきます」

大場は三百円うけとると、駒をしまいこんだ。

保彦が洗面所へ行って戻ってくると、大場は、若い整頓士の木崎を相手に、昔話をしていた。

「……そこでガソリンがつきたから、止むを得ず、暗夜の相模湾に着水したんだ。ところが、救命ブイが二個しかなかった。乗っていたのは、いまもいったように四人でね。このうち三人が金槌^{かなづち}なんだ。四人とも飛行機の上に這い上ったが、飛行機はみるみるうちに沈みはじめた……」

大場はそこで茶をすすった。木崎が焦れたように、「で、どうしたんですか」

「見渡すかぎり真っ暗でな。SOSは発信しておいたが、救助船はとうてい間に合いそうにない。局次長に部長におれの三人の金槌が二個の救命ブイを前にして、互いに顔を見合わせた……」

大場はタバコを吸った。深刻な表情であった。

「それで……」

「さすがのおれも観念した。ジャンケンやクジで決めるわけにもいかない。その間にも機はどんどん沈んで行く」

木崎がつばをのみこんだ。

「おれは、カアチャンよ元気で暮せ、と心のなかで叫んでから、もはやこれまでと海に飛びこんだ。不時着水するようになったのも、結局はおれの責任だからな」

「……………」

「ところがだ。飛びこんでみたら、なんと背が立つんだよ。干潮時の浅瀬に、運よく着水していたというわけ

だ」

「なアんだ」

「笑っちゃ、いかん。おれたちは、いつだって死と隣り合わせなんだから」

大場は、たしなめるようにいったが、表情は笑っていた。

保彦はその話を何度も聞いている。が、いつ聞いても、飽きることがなかった。

そのとき、給仕が入ってきた。

「神野さん、お客さんです」

見ると、会った記憶のない男が立っていた。年齢は五十近い。仕立てのいい背広を着て、眼鏡をかけていた。

男は、保彦のそばへ寄ってくると、名刺を差し出して名乗った。

「初めまして。勝沼といいます」

名刺の肩書は、サン株式会社取締役となっていた。

「ぼくににか……」

「ええ、ちょっとお話ししたいことがございまして」

勝沼の言葉つかいは丁寧だった。かれは、分室のなかをそれとなく見回し、ここでは具合が悪いというふうに眼くばせした。

なにか内密の話があるらしいとは推察できたが、保彦としては、勝手に分室を出るわけにはいかなかった。席をはずしている間にもし事件があれば、それだけ出遅れることになる。

すると、大場が声をかけた。

「神野君、ルナにでも行ったらいいじゃないか」

ルナというのは、分室から歩いて五分くらいの距離にあるスナックだった。

勝沼は、大場に向かい、頭を下げた。大場が眼を細めるようにして見かえし、軽くうなずいた。

保彦は勝沼といっしょに分室を出た。

勝沼は、運転手つきの自家用車できていた。ちらりと見たたその運転手の横顔は、気のせいかな、日本人ではなく、大陸系の人間のように思われた。勝沼は、いったん座席のドアをあけ、そこから小型の旅行ケースを持ち出

すと、保彦のあとに従った。

ルナに入ると、勝沼は隅の席を選んで、そこに保彦を誘った。顔なじみのウェイトレスの左樹子に保彦は紅茶を注文してから、勝沼にいった。

「どんなご用件ですか」

勝沼は用心深く、店内を見回した。客は、ほかにはだれもいなかった。

「とつぜんですが、神野さんのことは、城山さんからうかがいました」

城山というのは、保彦の航空大学時代の先輩で、いまは民間航空に勤め、ジェット機の副操縦士コパイロットをしている。

「そうですか。城山さんとはしばらく会っていないんですが、お元気ですか」

「ええ。お元気ですよ。そこで、早速、用件に入りますか……」

勝沼は持参してきた黒皮のケースを引き寄せ、その口金をはずした。

保彦は息をのんでしまった。ケースにいったい、一万

円札が詰まっていた。勝沼はなにげない口調でいった。「これを神野さんに進呈しましょう」

4

勝沼は手をのばして一つの札束をつまみ、数学の講義でもするような淡々としたいい方で続けた。

「これで百万円です。全部で二十束ありますから二千万円ということになります。もちろん、にせ札じゃありません」

それから一呼吸置き、もうじゅうぶん見たでしようね。といったげに保彦の方を見詰めてから、勝沼はケースを閉じた。保彦は眼をしばたいた。どこにでもあるような平凡な小型のケースだ。保険の外交員も持っているし、自動車のセールスマンもさげている。その中に本当に二千万円入っているのだろうか。いま眼にしたのは、なにかの幻覚ではなかっただろうか。

ケースは間違いなくかれの眼の前にあった。二千万円入っていることも確かであった。そして、二千万円の現

金を見たのは、保彦にとって、このときが生まれて初めてだった。

「それじゃ、本題に入りましょう。いうまでもないと思いますが、これだけの大金をタダで神野さんに進呈するわけじゃありません。あなたに、ある仕事をお願いしたいからです」

勝沼は一息ついてから眼鏡をはずし、おしぼりで顔をぬぐった。

先刻から、喋っているのは、勝沼ばかりだった。それは当然といえば当然なのだが、そのことに気がつく、保彦はにわかに腹が立ってきた。もっと厳密にいうならば、口もきけないくらいに動揺してしまった自分自身に、かれは怒りを感じたのだ。

「勝沼さん、なにが狙いだか知りませんが、たちの悪い冗談はやめてもらいましょう」

勝沼は眼鏡をかけなおした。

「いきなりこんなものをお見せして、びっくりされるのは当然だと思います。しかし、これは、たちの悪い冗談

やいたずらではありません。これからわたしのお話することが、真剣な話なんだとわかっていただきたくて、したことなんです」

「しかし、なにもないのに、二千万円なんていう大金をよこすバカはいない」

勝沼は微笑した。

「だから申しあげたでしょう。神野さんをお願いしたいことがあるって」

それは何だ、という言葉が飛び出しかかったのを、保彦はからも咽喉もとで抑えた。

勝沼は構わずに続けた。

「仕事のくわしい内容については、いまここで説明するわけには参りませんが、じっさいに着手するさいには、神野さんに外国へ行っていただくようになります。ですから、そのときは、新聞社の方も辞めてもらわねばならなくなるでしょう。この金は、そのための、いわば補償金のようなものです」

「勤めを辞める？」

「いますぐではないにしても、そういうことになります」
保彦は口のなかにたまっていたつばを嚥みこんだ。や

づと、からくりが解けたという気がした。

とつぜん、なんの脈絡もなく、ベテラン記者からかつて聞いた話が想い起こされてきた。何カ月間も政財界を揺さぶった汚職事件の端緒となった特ダネを書いたそのベテランが、こんなふうにいっただけのことがあるのだ。

——どうか記事にしないでくれていいやがってね、
五百万円の札束をおれのポケットにねじこもうとしたんだ。五百万円というと、たつぷり厚味があったなア。

正直いって、おれはグラグラしたよ。おれさえ口をつぐんでいれば、だれにもわからんのだからな。あれが小切手かなんかだったら、おれは即座にビリビリ破いたにちがいないが、現ナマだと、そうカッコよくはいかなかった。ああ、おれはいま財布のなかに五千円もないなと想いながら、からくも逃げ出してきた。あとで考えてみて、現ナマの偉力というのは恐しいと思ったね……。

勝沼がいぜん淡淡とした口調でいった。

「ご承諾いただければ、具体的な打合せをした上でこの金を……」

その声で、保彦はわれにかえった。いま自分はピンチに立たされている、とかれは感じた。あらゆる計器が故障しているのに悪天候のなかを飛ばねばならない、というふうな状況に似ている。なによりも必要なのは、冷静であることだ、と保彦は自分にいきかせた。

「待ってください。ぼくは承諾するなんて、いつていませんよ」

「敬服しました。あなたはじつに落ち着いていますね。これは、その冷静さを見込んでのお願いなのです」

「お世辞をいっても駄目です。どんな仕事か知りませんが、これ以上お話しする必要はないでしょう。いずれにしても、ぼくは新聞社を辞める気持はないんですから。帰ったら、社長さんにそう伝えて下さい」

「社長に？ 社長をご存知なんですか」

「トボけないでくれませんか。滝口淳平氏には、昨夜、会いましたよ」